

Tokyo Institute

2022年度

for 理論言語学講座要項

東京言語研究所

Advanced Studies of Language

開講期間

前期 ● 2022年 5月～7月

夏期集中 ● 2022年 8月

後期 ● 2022年10月～12月

申込期間

前期 ● 2022年 4月1日(金)～5月9日(月)

夏期集中 ● 2022年 6月24日(金)～7月25日(月)

後期 ● 2022年 8月19日(金)～9月26日(月)



2022年度 理論言語学講座要項 目次

委員長挨拶（研究所沿革）運営委員・顧問……………	P2～3
講座申込方法……………	P4
講座日および教室……………	P5
受講規定……………	P7
講座紹介……………	P8～9
時間割……………	P10
春期講座のご案内……………	P11
書籍のご案内……………	P12
理論言語学講座講義概要……………	P13～25
教室地図……………	P26

運営委員・顧問（2022年2月現在／50音順）

運営委員長 ● 窪 蘭 晴夫（国立国語研究所教授）

運営委員 ● 今西 典子（東京大学名誉教授）
大堀 壽夫（慶應義塾大学教授）
川村 大（東京外国語大学教授）
酒井 智宏（早稲田大学教授）
佐野 哲也（明治学院大学教授）
嶋田 珠巳（明海大学教授）
杉岡 洋子（慶應義塾大学名誉教授）
高橋 将一（青山学院大学教授）
長屋 尚典（東京大学准教授）
西村 義樹（東京大学教授）

顧 問 ● 池上 嘉彦（東京大学名誉教授／昭和女子大学名誉教授）
池内 正幸（名古屋外国語大学教授）
上野 善道（東京大学名誉教授）
大津由紀雄（関西大学客員教授／慶應義塾大学名誉教授）
尾上 圭介（東京大学名誉教授）
梶田 優（上智大学名誉教授）
西山 佑司（慶應義塾大学名誉教授）
長谷川欣佑（東京大学名誉教授／獨協大学名誉教授）

運営委員長挨拶

東京言語研究所は1966年3月、故服部四郎博士(東京大学教授、当時)の構想をもとに開設されました。服部博士は当時、日本の大学のシステムの制約上、ほとんど満足のいく教育体制が存在しないことに強い危機を感じられ、大学の枠を超えて、才能ある人々に言語学の重要性和面白さを認識させる「言語学の塾」を創設しようと考えられました。

その目的に沿って、研究誌や月刊誌の刊行、公開講座や国際セミナーの実施など数々の企画が実行されました。その中核に位置づけられていたのが、1966年5月以来、休むことなく毎年開講されてきた理論言語学講座です。それは、第一級の教授陣を配した、体系的なカリキュラムからなる言語科学専門のコースです。1960年代と今日とでは、言語学環境は大きく変わりましたが「言語の理論的研究に裏打ちされた真の言語学基礎教育をおこなう」という講座の目的・理念は今でも変わっておりません。

その一方で、理論言語学講座も21世紀の言語科学が向かう先を見据えて、新しいカリキュラムを構築し、人々の現代的要請に応えようとしています。2016年に研究所が開設50周年という重要な節目を迎えたのを機に、今後の理論言語学講座のあり方について検討を重ね、2017年度から理論言語学講座の開講時間と時間割を大幅に変更いたしました。具体的には、毎日2時限(各90分) x 11週という時間割から毎日100分の1限制に変更し、また講座を原則として半期制にしました。1日に受講できる授業数は減りましたが、授業開始時間が6時から7時に変わったことに伴い、仕事や大学の授業を終えてからの参加が容易になったのではないかと思います。この改革に伴い、理論言語学講座の授業が一部、集中講義(夏期集中)として実施されることになりました。また2020年からはコロナ禍に対応するためにオンラインでの授業が導入され、首都圏以外の方々の受講も可能になりました。

本研究所では、このような形で理論言語学講座の一層の充実を図ると同時に、以下のような多彩な事業を毎年企画しています。

- (i) キックオフである春期講座
- (ii) ことばと関連した諸分野の第一線で活躍されている講師による公開講座
- (iii) 理論言語学の専門家を講師に迎える集中講義
- (iv) 教師のためのことばセミナー

一人でも多くの方が、言語の本質を問題にする本講座を受講され、ことばについて考えることの楽しさと奥深さを共有していただきたいと思います。多数のご参加をお待ちしております。

東京言語研究所 運営委員長
窪 晴夫

2022年度 理論言語学講座 受講要項

受講条件

大学教養課程修了程度の一般的な学力があることが望ましいが、学歴、年齢、国籍は問わない。

申込み方法

東京言語研究所ホームページの「受講申込みフォーム」に必要事項を入力し、送信する。

1. 前期講座 4月1日(金)～5月9日(月) AM10:00まで
2. 夏期集中講座 6月24日(金)～7月25日(月) AM 10:00まで
3. 後期講座 8月19日(金)～9月26日(月) AM10:00まで

申込期間

※期日までに新規生、および継続生ともに申込みをし、受講料の振込みをおこなう(申込みと受講料の振込みの締切は同日)。

※「新規生」とは、東京言語研究所で理論言語学講座を初めて受講する方(過去に春期講座や集中講義、公開講座を受けた方は含みません)。

※「継続生」とは、過去5年以内に理論言語学講座を受講した経験のある方。

※受講料の振込みを確認次第、事務局より受講票をE-mailにてお送りします。講義に関する情報は、講義開始の前週の水曜日までにお知らせします。

■入学金 11,000円(新規生のみ/税込)

■受講料(税込)

1. 一般

- ・半期 1 課目 25,000円
- ・通年 1 課目 50,000円

2. 学生・大学院生

- ・半期 1 課目 12,500円
- ・通年 1 課目 25,000円

※ 通信教育課程や課目等履修生は一般受講料となります。

※ 学生・大学院生は、学生証のコピーを提出ください(メール添付可)。

■受講料の振込み

1. 郵便振替の場合

00110-8-43537(名義) 財団法人 ラボ国際交流センター

2. ゆうちょ銀行振込みの場合

銀行名 ゆうちょ銀行 金融機関コード 9900

預金種目 当座

店名 〇一九店(ゼロイチキユウ店) 店番 019

口座番号 0043537

名義 財団法人 ラボ国際交流センター

3. りそな銀行振込の場合

銀行名 りそな銀行 金融機関コード 0010

支店名 新都心営業部支店 支店番号 675

預金種目 普通預金

口座番号 6726641

名義 財団法人ラボ国際交流センター

ザイ) ラボコクサイコウリュウセンター

※振込手数料は受講者負担となります。

4. 海外からの送金情報

- ・ Bank Name & Address : Resona Bank, Ltd
Shintoshin Banking Department
6-12-1 Nishi-shinjuku Shinjuku-ku Tokyo Japan
- ・ Account Number : Savings account 6726641
- ・ SWIFT Code : DIWAJPJT
- ・ Nominee : Labo International Exchange Foundation
1-3-21, Okubo, Shinjuku-ku, Tokyo 169-0072 Japan

※海外からの送金の場合も、振込手数料は受講者負担となります。
手数料は、国や銀行によって異なりますので各自で確認ください。

前期／オンライン開講式 およびガイダンス

● 4月23日(土) 10:00～11:45

1. ミニ講義「言語研究の面白さ」講師:大津由紀雄(関西大学客員教授／慶應義塾大学名誉教授)
2. 2021年度理論言語学賞授賞式
3. 理論言語学講座オリエンテーション

※4月1日(金)より公式サイトにて申込み受付開始

後期／オンラインガイダンス

● 9月17日(土) 10:00～11:00

1. ミニ講義「言語研究の面白さ」講師:杉岡洋子(慶應義塾大学名誉教授)
2. 理論言語学講座オリエンテーション

※ガイダンスは受講を確定された方だけではなく、受講を検討中の方も受けられます。

※8月19日(金)より東京言語研究所ホームページにて申込み受付開始

講義

1. スケジュール

月～金曜／前期10回、後期10回／19:00～20:40／各回100分(祝祭日は休講)

2. 日程

	前 期	後 期
月	5/16,23,30,6/6,13,20,27,7/4,11,25	10/3,17,24,31,11/7,14,21,28,12/5,12
火	5/17,24,31,6/7,14,21,28,7/5,12,19	10/4,11,18,25,11/1,8,15,22,29,12/6
水	5/18,25,6/1,8,15,22,29,7/6,13,20	10/5,12,19,26,11/2,9,16,30,12/7,14
木	5/19,26,6/2,9,16,23,30,7/7,14,21	10/6,13,20,27,11/10,17,24,12/1,8,15
金	5/20,27,6/3,10,17,24,7/1,8,16,23	10/7,14,21,28,11/4,11,18,25,12/2,9

夏期 言語哲学入門(野矢茂樹) 8月5日(金)～7日(日)……対面形式★を併用

集中 生成文法Ⅲ(斎藤 衛) 8月19日(金)～21日(日)

★対面形式講義の会場

新宿区大久保1-3-21 ルーシッドスクエア新宿イースト2階 ラボ教育センター内

3. 申込みをされた時点で、以下の事項に同意されたものとします。

- ・全講義オンライン（ZOOM）で配信します。「[ZOOMのよくあるご質問](#)」などをご参照の上、ご自身で設定してください。
- ※夏期集中講義の「言語哲学入門（8月5～7日）」については、対面形式の講義を併用予定です。その際は講義をオンライン中継します。
- ・講義はリアルタイムでの受講のみで、ご自身での講義の録画はできません。
- ※合理的配慮に基づき、障がい者手帳をお持ちの方に録画を許可する場合があります。その場合は、申込み時に事務局に連絡ください。
- ・事務局の内部資料として、講義全般を録画する場合があります。事務局が録画した講義の公開や二次使用はいたしませんのでご了承ください。
- ・参加者のパソコン等の性能やインターネット回線の状態によっては、正常に受信できない場合があります。接続環境の良好な場所からアクセスをお願いします。オンライン講座に関するパソコン操作や、インターネット環境に関する技術的なサポートは行っておりませんので、必ず、事前に確認ください。
- ・ZOOMに入室される際には、登録のお名前でご参加ください。
- ・講師への質問は、受講講座開講期間中に限ります。
- ・次のような好ましくない行為があった場合は、退出、受講の停止、もしくは受講の取り消しをすることがあります。なおその場合は、受講料の返金は致しません。
 - ①他の受講生の迷惑となる行為や、授業の進行を妨げるような行為を行った場合。
 - ②事務局の業務妨害や運営業務の遂行を妨げる行為があり、事務局が不適当と判断する場合。
例）他の受講生、講師、事務局スタッフへの誹謗、中傷や迷惑行為を含む。
 - ③授業のリンク（招待 URL）、および資料などの情報を他者に共有する行為を行った場合。
 - ④個人での録音、録画、スクリーンショットでの撮影を行った場合。

4. 講義資料

- ・講義資料は、原則的に Google ドライブにて各講義の資料を共有します（一部の講座を除く）。
- ※講座を申込みの際に、無料で入手できる「Google アカウント（E-mail アドレス）」を準備し、ご登録 E-mail アドレス欄にご記入ください。Google アカウント以外から資料の共有を希望される場合は、講義の情報を入手後に、ご自身で共有ドライブのアクセス権限を管理者である事務局に求める操作が必要になります。なお、アクセス権限を管理者が許可する時間帯は業務時間（平日 10：00～17：00 / 木曜除く）内です。土日の対応はいたしかねますので留意ください。
- ※「生成文法Ⅰ」と「音声学」の2講座については、Dropboxを使用予定です（Dropboxのアカウントを持っていなくても使用可能）。

5. 休講

- ・講師の都合等で休講となる場合があります。休講が発生した場合は、E-mail でご連絡します。休講があった場合は補講を実施します。

6. レポートの提出

- ・受講終了後に、成績評価のためのレポート提出（任意）を受け付けます。期限は各講座によって異なるため、各講師の指示する日までに、指定の方法にて提出ください。

7. 講座開講の要件

講座開始の1週間前（18:00）までに受講生が10名に満たない場合は、開講しません。講座が開講されない場合、当該課目の受講予定者には E-mail にて連絡し、納入済の受講料を返金します。

事務局問い合わせ受付時間

平日 10:00～17:00 / 木曜除く ※社会情勢により受付時間が変更になる可能性があります。

受講規定

- (1) 在籍年限は特に定めない。
- (2) 各年度の受講課目数は原則として制限しない。ただし、講座開始後の受講課目変更は原則として許可しない。
- (3) 1 課目につき、出席回数が講義実施回数の2分の1以上であることを学期末及第とする。
- (4) 学期末の成績評価は、原則として提出されたレポートに基づいておこなう。成績は、A, B, C, Dとし、C以上を及第とする。
- (5) 別途定める基準により、卒業認定された受講者には、本講座の卒業証書を授与する。当該受講生は、以後、随意的講義を担当講師の許可を得て無料で受講することができる。
- (6) 同一課目を2回以上受講した場合には、卒業の際、その最高点をもって当該課目の成績とする。
- (7) 6年連続して出席率が2分の1以上の課目がない場合は除籍する。但し、休学期間は算入しない。
- (8) 休学期間は最長連続6年とする（休学手続きは、予め事務局に備付けの用紙を用いて行うこと）。
- (9) 通年講座で開講後受講回数10回以下で退学することが予め判っている者、ならびに10月以降の受講開始を希望する場合は、担当講師の許可を得て受講を認める。その際の受講料の半額に2,000円プラスしたものにす。すなわち、1課目受講につき、(受講料の半額+税) + 2,000円とする。学生割引対象者も上記に準じる。
- (10) 当研究所の都合以外の理由で、定められた日時までに受講料納入手続きを完了しない場合、および受講手続き終了後の受講課目変更の場合には、特別手数料として1件につき1,000円申し受ける。
- (11) 講座開講後、既納入諸費用は受講講座不成立の場合を除き、原則として返金しない。

[服部四郎賞、理論言語学賞]

- (1) 服部四郎賞は、学術的に特に優れたと認められる論文（講座のレポート）に対して与えられる。副賞の奨学金は10万円とする。
- (2) 理論言語学賞は講座において成績優秀なものに与えられる。副賞の奨学金は4万円とし、受講者は毎年5人程度をめやすとする。ただし、同一受賞者は同一課目につき3回までとする。また、半期講座の場合の奨学金は2万円とする。学生割引対象者の副賞は、上記の半額とする。

〈卒業要件〉

下の規定を満たした者に本講座の卒業証書を授与する。

規定

- ①通年講義1課目1年を1単位、半年講義1課目半年を0.5単位として、合計12単位を優秀な成績をもって取得すること。
- ②上記12単位の中に、別表（P.8参照）に記すI群からV群の科目群について下に示す単位数を含むこと。
 - I群から1単位以上。
 - II群から2単位以上。
 - III群から1単位以上。
 - IV群から1単位以上。
 - V群から3単位以上。

「優秀な成績」の基準および、個々の単位の認定の詳細に関しては運営委員会で決定する。ただし、上記は2012年度以降に入学した者に対して適用するものであり、2011年度以前に入学した者については別途これを定める。なお、卒業者は本講座の講義を、担当講師の許可を得て、無料で聴講することができる。

〈証明書発行手数料〉

在籍証明書、単位取得証明書、卒業証明書各1通につき1,000円。

	講義カテゴリー	講義題目 (担当者)
I 群	言語学入門	言語の多様性入門 (長屋尚典)
	言語学概論	言語学概論 (嶋田珠巳他 9 名)
	言語学史	
II 群	音声学	調音音声学 (中川 裕)
		フィールド音声学 (中川 裕)
	形態論・語形成論	形態論・語形成論 (杉岡洋子)
	統語論	
	意味論	意味論の基礎 (酒井智宏)
	語用論	語用論入門 (松井智子)
III 群	生成文法入門	生成文法 I (大津由紀雄)
	生成文法	生成文法 II (福井直樹)
		生成文法 III (斎藤 衛)
IV 群	認知言語学入門	認知言語学 I (西村義樹)
	認知言語学	認知言語学 II (池上嘉彦)
V 群	社会言語学	社会言語学 (嶋田珠巳)
	史的言語学	英語史概論 (堀田隆一)
	言語心理学	母語獲得研究入門 (杉崎鉦司)
	日本語文法理論	日本語文法理論 I (尾上圭介)
		日本語文法理論 II (小柳智一)
	言語学特殊講義	言語哲学入門 (野矢茂樹)
	言語学特殊研究	

理論言語学講座は、2022年度も、広い研究領域について数多くの課目を開講しました。各課目の詳細は担当講師による概要をお読みいただくとして、ここでは理論言語学講座全体について鳥瞰いたします。

前頁の表のⅠ～Ⅴ群の区別は、東京言語研究所が定めた言語学のカテゴリー区分です。2022年度は全体で、前期と後期各7課目、通年3課目、夏期集中2課目の計19の課目を用意しました。Ⅰ群の課目は、言語学を初めて学ばれる方や、言語研究の諸分野を万遍なく学びたいという方向けに開講するもので、今年度は言語学概論(前期+後期)と言語学入門(前期)を設定しました。言語学概論は10名の講師がそれぞれ専門の分野を2回ずつ担当するリレー形式の講義です。前期と後期の半期科目として設定されていますが、言語研究の全体像をつかみたい方には両期の受講をお勧めします。また言語学入門では、消滅の危機に瀕した言語を通して言語の多様性を探ります。

Ⅱ群の課目は、理論言語学の基礎課目です。「音声学」に「調音音声学」(前期)と「フィールド音声学」(後期)の2課目を設定しました。前期の授業ではIPA (International Phonetic Alphabet) を用いた調音訓練を通して音声学の基礎を身につけ、後期の授業ではフィールドワークにおける音声学・音韻論的な調査手法の基礎を学びます。「形態論・語形成論」(後期)では、語形成の各プロセスから言語と心の仕組みを探ります。「意味論」(後期)では基本的な論文を読みながら「意味」の意味を掘り下げ、「語用論」(後期)では、会話を中心とした日常的なコミュニケーションのメカニズムを分析します。

現代の理論言語学には生成文法と認知言語学という二大潮流がありますが、これらを学ぶのがⅢ群とⅣ群の課目です。Ⅲ群の生成文法については「生成文法Ⅰ」(通年)と「生成文法Ⅱ」(前期)および「生成文法Ⅲ」(夏期集中)の3課目を設定しました。Ⅰでは生成文法を基礎から学び、ⅡとⅢでは中上級の問題を考察します。

Ⅳ群の認知言語学には2課目用意しました。「認知言語学Ⅰ」(後期)では、文や意味などに関する根本問題を認知文法の観点から考察し、「認知言語学Ⅱ」(通年)では、『「する」と「なる」の言語学』とその周辺を探ります。

Ⅴ群に属する講座として6つの課目を用意いたしました。「社会言語学」(後期)では、「言語の社会関与性」を考察し、「史的言語学」(前期)では英語という言語を歴史的・通時的な視点から分析します。「言語心理学」(前期)では生成文法理論の視点から母語獲得のメカニズムを探り、「言語学特殊講義(言語哲学入門)」(夏期集中)では「言葉が何かを意味するというのとはどういうことなのか」という根本的な問題を考察します。

Ⅴ群にはまた、日本語の文法を考察する2つの課目を設定しました。「日本語文法理論Ⅰ」(通年)では日本語文法について「なぜ」を問い、そこから何が見えてくるか考察します。「日本語文法理論Ⅱ」(前期)では、いくつもの日本語文法論の中から川端善明の「川端文法」を取り上げ、その本質を解説します。

このように、2022年度も多様な講座を用意いたしました。できるだけ幅広く、さまざまな課目を計画的に受講していただきたいと思います。

(運営委員長 窪園 晴夫)

2022年度 講座時間割

● 前期 5月16日～ 10週間（祝祭日は開講しません）

時間	月	火	水
19:00～20:40 (100分)	言語学概論 嶋田珠巳他4名	言語心理学 杉崎鉦司 関西学院大学教授	英語史概論 堀田隆一 慶應義塾大学教授
	生成文法Ⅱ 福井直樹 上智大学教授	認知言語学Ⅱ 池上嘉彦 東京大学名誉教授	言語学入門 長屋尚典 東京大学准教授
時間	木	金	夏期集中(3日間)
19:00～20:40 (100分)	日本語文法理論Ⅰ 尾上圭介 東京大学名誉教授	生成文法Ⅰ 大津由紀雄 関西大学客員教授	野矢茂樹 立正大学教授 言語哲学入門 8月5～7日 齋藤 衛 南山大学教授 生成文法Ⅲ 8月19～21日
	調音音声学 中川 裕 東京外国語大学教授	日本語文法理論Ⅱ 小柳智一 聖心女子大学教授	

● 後期 10月3日～ 10週間（祝祭日は開講しません）

時間	月	火	水
19:00～20:40 (100分)	言語学概論 長屋尚典他4名	語用論入門 松井智子 中央大学教授	形態論・語形成論 杉岡洋子 慶應義塾大学教授
	認知言語学Ⅰ 西村義樹 東京大学教授	認知言語学Ⅱ 池上嘉彦 東京大学名誉教授	社会言語学 嶋田珠巳 明海大学教授
時間	木	金	オンラインガイダンス (視聴無料、登録制) 前期 4月23日(土) 後期 9月17日(土) ・各講師が講座概要をオンライン配信 ・ミニ講演「言語研究の面白さ」(前期後期各30分)
19:00～20:40 (100分)	日本語文法理論Ⅰ 尾上圭介 東京大学名誉教授	生成文法Ⅰ 大津由紀雄 関西大学客員教授	
	フィールド音声学 中川 裕 東京外国語大学教授	意味論の基礎 酒井智宏 早稲田大学教授	

※1日(19:00～20:40)に受講できるのは1科目です。

言語学概論 担当者および担当日

前期	社会言語学	嶋田珠巳	5/16, 23
	形態論	松本 曜	5/30, 6/6
	語用論	松井智子	6/13, 20
	認知言語学	大堀壽夫	6/27, 7/4
	音声学	窪菌晴夫	7/11, 7/25
後期	言語類型論	長屋尚典	10/3, 17
	言語心理学	佐野哲也	10/24, 31
	日本語文法論	川村 大	11/7, 14
	史的言語学	吉田和彦	11/21, 28
	生成文法	高橋将一	12/5, 12



対面



ZOOMによる
オンライン

春期講座のご案内

二日間で、受講者に現代言語学の主要な研究領域やアプローチを紹介し、魅力ある言語学の世界へ誘うことを目的としています。2022年度理論言語学講座を担当する講師を中心に講座編成がおこなわれていますので、理論言語学講座を検討中の方はこの講座を受講することをお勧めしています。すべての講座をオンラインで行います。詳細は研究所ホームページをご覧ください。

課 目 (講師)		
〈1日目〉 4月16日 (土)	1限	言語学入門：会話の言語学（長屋尚典）
	2限	生成文法Ⅲ：カートグラフィーは、何の記述なのだろうか？（斎藤 衛）
		社会言語学（嶋田珠巳）
	3限	形態論・語形成論：複合語の多様性からわかること（杉岡洋子）
		音声学（中川裕）
	4限	認知言語学Ⅰ（西村義樹）
		生成文法Ⅰ（入門）（大津由紀雄）
〈2日目〉 4月17日 (日)	1限	認知言語学Ⅱ（池上嘉彦）
	2限	史的言語学：英語史でみる英語語彙の世界性（堀田隆一）
		認知語用論（松井智子）
	3限	生成文法Ⅱ：「生成文法の企て」概観（福井直樹）
		日本語文法理論（尾上圭介）
	4限	言語心理学：はじめての言語獲得研究（杉崎鉦司）
		意味論：意味論へのご招待（酒井智宏）

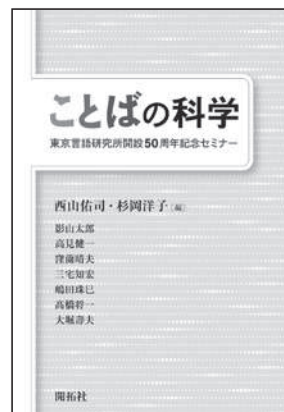
- ・ 1限 (10:00～11:20)
- ・ 2限 (11:40～13:00)
- ・ 3限 (14:00～15:20)
- ・ 4限 (15:40～17:00)

書籍のご案内

「ことばの科学」

西山佑司・杉岡洋子〔編〕

定価：本体 2,000 円 + 税



服部四郎博士の構想により、1966年に開設された東京言語研究所。2015年に開催された開設50周年記念セミナーを元に編纂しました。ことばの科学が切り開く豊かで刺激的な世界へ読者を誘い、ことばを科学することの喜びと重要性を伝えます。

第Ⅰ部 日本語はどういう言語か —内から見た日本語、外から見た日本語—

影山太郎 第1章 複合語の小宇宙から日本語文法の大宇宙を探る

1. はじめに
2. 動詞領域と名詞領域に見られる膠着性の非対称性
3. 時制付きの複合動詞
4. 時制を伴わない複合述語
5. 定型と非定型の中間的な複合述語
6. まとめ

高見健一 第2章 話し手考慮の重要性と日本語 —「～ている」と「～てある」表現を中心に—

1. はじめに
2. 「～ている」構文
3. 「～てある」構文
4. 結び

第Ⅱ部 ことばの科学 —将来への課題—

窪菌晴夫 第3章 音韻論の課題 —類型論的観点から見た日本語の音韻構造—

1. はじめに
2. 母音の有標性
3. 子音の有標性
4. 音節とモーラ
5. 音節構造の有標性

三宅知宏 第4章 日本語の課題 —「記述」と「理論」の壁を越えて—

1. はじめに
2. 現状と今後の方策
3. 事例
4. おわりに

嶋田珠巳 第5章 社会言語学の課題 —ことばの選択を考える—

1. はじめに
2. ことばの選択
3. ことばの選択をめぐる社会言語学の話題
4. アイルランドの事例にみる「ことばの選択」
5. 「〈社会言語学〉将来への課題」を視野に

高橋将一 第6章 生成文法の課題 —人間の言語機能の解明に向けて—

1. はじめに
2. 併合とその制約
3. 節減理論への経験的挑戦
4. おわりに

大堀壽夫 第7章 認知言語学の課題 —文化解釈の沃野—

1. 序論
2. 認知言語学の過去・現在・未来
3. 解釈的言語学
4. 文化のキーワード
5. 結論

理論言語学講座概要

※各講義題目の右脇の表示は、その講義題目がどの講義
カテゴリーに属するかを示すものです。講義カテゴリー
は受講生が本理論言語学講座の卒業要件を満たすかど
うかを判定する際に用いられます。

通年講座（前期と後期でセットの講座）

前期 2022年5月16日～ 全10回（祝祭日の講義はありません）
19：00－20：40（100分）

後期 2022年10月3日～ 全10回（祝祭日の講義はありません）
19：00－20：40（100分）

『「する」と「なる」の言語学』とその周辺——共時的、通時的に、そして学際的にも

認知言語学Ⅱ

認知言語学 ④

外国語と多かれ少なかれ苦労してつき合った経験のある人なら、誰しもその反面、いつの間にか自然と身についた自分の母語とは、（勉強して多かれ少なかれ身につけた外国語と較べて）一体どういう言語なのかと改めて考えてみたくなるはずだ。『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論』と題された書物（大修館書店、1981）も、そのような問いかけから生まれたもの—エッセイ風の考察と言語学的な論考との中間あたりを念頭に置いての著作でした。変形文法一色に染まっていた時期には異

端的な存在と見做されていたらしいですが、現在まで18刷を重ね、今では認知言語学的な先駆的試みと受けとめられているようです。昨年度は、丸山真男の著名な論考「歴史意識の『古層』」に触れ、そこで提示されている〈なる・なりゆく〉—〈つぎ・つぎつぎ〉—〈いきおい〉という概念系列について、言語（学）的な観点からどのような展開が可能かを末広がり的に検討してみました。本年度は漸く、「〈スル〉的な言語と〈ナル〉的な言語」という論点を下記論考に沿って具体的に考察するという段階にはいります。

池上 嘉彦
いけがみ よしひこ



東京大学名誉教授、昭和女子大学名誉教授
東京大学で英語英文学 (B.A., M.A.)、Yale 大学大学院で言語学 (M.Phil., Ph.D.) を専攻。インディアナ大学、ミュンヘン大学、ベルリン自由大学、チュービンゲン大学、北京日本学研究中心、などで客員教授、ハンブルク大学、ロンドン大学、などで客員研究員。日本認知言語学会名誉会長。著書：『英詩の文法』（研究社）、『意味論』（大修館書店）、『「する」と「なる」の言語学』（大修館書店）、『ことばの詩学』（岩波書店）、『詩学と文化記号論』（講談社）、『記号論への招待』（岩波書店）、『〈英文法〉を考える』（筑摩書房）、『日本語と日本語論』（筑摩書房）、『自然と文化の記号論』（日本放送出版協会）、『英語の感覚・日本語の感覚』（日本放送出版協会）など。学術書翻訳、論文、多数。

テキスト・参考文献「表現構造の比較—〈スル〉的な言語と〈ナル〉的な言語」（国広哲弥編『日英語比較講座・第4巻・発想と表現』（pp.82-110）研究社、1982）をpdfでテキストとして共有。その他多くの関連文献からの引用をハンドアウトとして配布。

この課目で前提とされる知識など 日本語母語話者でなくても、日本語に特別な関心があり、そして（当然ですが）ある程度の習熟度のある人なら、歓迎です。母語話者であるならば、母語話者として日本語を改めて考えてみるという試みの魅力を体験してほしいと思います。認知言語学については、専門的な知識は必要なく、言語への深い関心があれば十分です。

講義形態 ハンドアウトを参照しながらの講義形式が中心になります。

「なぜ」を問うところから何が見えてくるか

日本語文法理論 I

日本語文法理論 ㊦

母国語の文法に関する思索のおもしろさは、「なぜ」を問うところにあります。その「なぜ」の90パーセントは、下の(A)(B)のいずれかです。

(A) 言語の根源的大問題をめぐって、「なぜ」を問う。

(A-1) どの言語にも品詞として名詞と動詞がある。なぜか。

(A-2) 文(述定文)に主語と述語があるのはなぜか。

(A-3) 述語がなくても文としての意味を伝えるのはなぜか。

〈述定文と非述定文〉〈すべての文で、文の意味とは存在承認か希求〉

(A-4) 述語の文法的意味として、過去・現在・完了などの時間性と、推量・意志・可能性などのモダリティ

(非現実領域の事態を語るときの意味)とがある。なぜか。そもそもモダリティとは何か。

〈現実界存在と非現実界存在〉

(B) 日本語の個別文法形式の多義性に関して「なぜ」を問う。下はその一例。

(B-1) 動詞スル形が多義性の由来(眼前の運動の描写・命令・主語の性質など)

(B-2) 動詞シヨウ形が多義性の由来(〔終止法〕推量・意志・勧誘・命令、非終止法)未実現・可能性など)

(B-3) ラレル形述語の多義性の由来(可能・意図成就・自発・尊敬・受身など)

(B-4) 係助詞ハの多義性(題目提示・対比・当該事態への集中など)の由

テキスト・参考文献 尾上圭介『文法と意味 I, 同 II』(くろしお出版、2001、2022近刊)

この課目で前提とされる知識など 必要ない。新奇的な議論を受け止める柔軟な頭脳さえあれば。

講義形態 講義形式で進めます。

尾上 圭介

おのえ けいすけ



東京大学名誉教授

東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了(国語学)。博士(文学)。専攻は文法論、意味論、文法史、および「大阪のことばと文化」。著書に『文法と意味 I』(くろしお出版、2001)、『大阪ことば学』(岩波現代文庫、2010)、『朝倉日本語講座第6巻』(編著、朝倉書店、2004)、日本語文法学会編『日本語文法事典』(共編大修館書店、2014)など。

来、モの多義性(列記不能なぐらい多様)の由来

○(B)の「なぜ」は、その文法形式固有の語性と結果的に表す意味(用法)を峻別して、語性から論理的に用法を導き出すという方法によってこそ説明できる。〈語性用法派〉の観点。

○(A)(B)両方を理解するための見解として、文の意味とは、大きく言ってしまうと、〈存在承認〉か〈希求〉である。

生成文法をとおして科学研究の楽しさを知る

生成文法 I (入門)

生成文法入門 ㊧

この講義では生成文法について基礎から学びます。

前期の前半部では、近年「言語生物学(biolinguistics)」と呼ばれることが多い、認知科学・神経科学としての生成文法について解説します。この理解が不鮮明であると生成文法の発展や今後の展望について理解がおぼつかないので、丁寧に説明します。主たる参考文献はN. Chomsky. 1965. *Aspects of the theory of syntax*. MIT Pressの第1章(福井・辻子による邦訳『統序理論の諸相—方法論序

説』岩波文庫あり)です。

前期の後半部からは、A. Carnie. 2021. *Syntax: a generative introduction (fourth ed.)*. Wiley-Blackwellと渡辺明. 2009. 『生成文法』東大出版会とを適宜利用しながら、統語論を例に生成文法の言語分析の方法を講じます。Carnie 2021は英語で書かれた教科書ですが、平易な英語で書かれています。同書を読み、英語文献を読む力をつけることも可能です。2冊手元に置いておくと便利ですが、どちらか1冊ということであれば、Carnie

参考図書 文中参照

この課目で前提とされる知識など 言語学、認知科学などについて前提とされる知識は特段ありません。必要なのは知的好奇心と旺盛な探求力です。

講義形態 講義形式で進めますが、できるだけ演習の要素も取り入れます。

大津 由紀雄

おおつ ゆきお



関西大学客員教授、慶應義塾大学名誉教授一貫した知的関心は認知科学としての生成文法(ことに、母語獲得と統語解析)にあります。その研究成果をもとに言語教育の在り方を考えることも重要な課題だと認識しています。日本認知科学会フェロー。Ph.D. (MIT)。今西典子・大津由紀雄. 2017. 「時間表現の発達—時間の言語化にみられる普遍性と多様性の観点からの考察」*Brain and Nerve* 69(11) 1251-1271、大津由紀雄. 2016. 「ことばについて知ることの大切さ」『日本語学』35(2) 2-12、大津由紀雄. 2015. 「ことばの認知科学」*Clinical Neuroscience* 38(3) 877-881 など。

2021 を用意してください。

この課目は《生成文法に入門すべく試みたがうまくいかなかった》《生成文法に興味はあるが敷居が高い》という向きにお勧めです。

前期 (半期単位で受講可能)
2022年5月16日～ 全10回 (祝祭日の講義はありません)
19:00 - 20:40 (100分)

言語研究の全体像を知る

言語学概論

言語学概論 ①

この講義では言語研究の5つの主要分野について、各分野の専門家が2回(2週)ずつリレー形式で解説を行います。「言語学概論」はこれまで半期の課目として、一人の講師がすべての分野をカバーする形で開講されてきました。今年度は前期と後期の二期に分けて開講し、合計20回の講義を計10名の講師が分担する形で、言語研究の各分野の考え方と言語研究の面白さを解説いたします。半期だけ

の履修も可能ですが、言語研究の全体像を理解するためにも両期とも受講されることをお勧めします。

今期は社会言語学、形態論・語形成論、語用論、認知言語学、音声学の5分野について解説したいと思います。単位取得を希望する人は5名の講師が一題ずつ出すテーマから1つを選んでレポートを提出していただきます。

嶋田 珠巳
しまだ たまみ
明海大学教授

松本 曜
まつもと よう



国立国語研究所理論・
対照研究領域教授

松井 智子
まつい ともこ
中央大学教授

窪菌 晴夫
くぼその はるお
国立国語研究所教授

専門は、意味論、形態論、統語論、語用論、類型論、認知言語学。主著に Complex predicates in Japanese (CSLI Publications)、編著に『移動表現の類型論』(くろしお出版) などがある。

大堀 壽夫
おおほり としお

慶應義塾大学環境情報学部教授

Ph.D.(言語学)を1992年にUC Berkeleyより取得。主として意味論、機能的類型論(特に接続構造の類型と通時相)、談話分析、日本語、英語、東アジア諸語について研究。『認知言語学』(2002, 東京大学出版会)、『従属節の階層を再考する: 南モデルの理論的基盤』(2014, 益岡隆志他編『日本語複文構文の研究』, ひつじ書房)、M. トマセロ編『認知・機能言語学』(共訳2011, 研究社)。

プロフィール=上記以外は各講師の講義欄参照

テキスト・参考文献 各講師が指定 (もしくは配布) する。

この科目で前提とされる知識など ことばに関心のある人はどなたでも受講できます。言語学を一から学びたい方、言語研究の全体像をもう一度理解したい方、大学等で言語学概論をどのように教えたらいいか模索している方に特にお勧めの授業です。

講義形態 講義形式で進めます。

「生成文法の企て」の本質を考える

生成文法Ⅱ 極小主義の現在

生成文法 ②

Noam Chomsky氏が日本言語学会で行なった講演を基にして『言語研究』に寄稿した Minimalism: where are we now, and where can we hope to go (2021) という論考を読みながら、そこに書かれていることに inspire される形で、生成文法を中心とする様々な知的分野に関して自由にディスカッションを行なっていきたいと思います。

生成文法の知的背景をなす近代科

学革命の思想、アメリカ構造主義言語学の伝統との対比、単純性を巡る科学哲学的議論、計算の理論と生成文法、言語能力の発生・進化、言語と外在化の関係、「極小主義の強いテーゼ」(SMT)と併合の新たな定式化、SMTが持つ促進機能の検討、等々が話題になるかと思っています。

生成文法的思考の根本部分と先端部分の議論を参加者のみなさんと共有したいと思っています。

福井 直樹
ふくい なおき



上智大学大学院言語科学研究科教授

専門は、理論言語学、認知科学。マサチューセッツ工科大学言語学・哲学科博士課程修了(Ph.D., 1986)。ペンシルベニア大学言語学科助教授、カリフォルニア大学アーバイン校言語学科教授などを経て、2003年より上智大学教授。主な著書に Theoretical Comparative Syntax (2006)、『新・自然科学としての言語学』(2012)、Merge in the Mind-Brain (2017)、Symmetrizing Syntax (2022, 共著) などがある。

テキスト・参考文献 テキストは Chomsky, Noam (2021) Minimalism: Where are we now, and where can we hope to go. 『言語研究』160号。サイドリーディングとして、酒井邦嘉他 (2022) 『脳とAI—言語と思考へのアプローチ』中公選書。その他の参考文献は講義の中で紹介していきます。

この科目で前提とされる知識など 言語を中心として幅広い知的興味を持っていることを期待します。言語学入門、生成文法入門程度の基礎知識があれば、ディスカッションを理解するうえで役に立つと思いますが、必須というわけではありません。分析的に物事を考える習慣、わからないことをわからないままにしない態度は必要です。

講義形態 講義演習方式です。積極的に議論に加わっていただくことを期待しています。

「こころ」にせまる母語獲得研究

言語心理学 母語獲得研究入門

言語心理学 ④

「こころ」(mind)のさまざまな領域について、その発達には先天的要因と後天的要因の両方が関与しており、発達はその相互作用によって説明されるべきことが明らかとなっています。生成文法と呼ばれる言語理論は、母語知識はこころの領域の一つであり、その獲得は①人間に生まれつき備わっている母語獲得のための内的メカニズムと②生後に取り込まれる言語情報との相互作用によって達成されると仮定しています。つまり、母語知識は多くの人々が素朴

に思い描いているように子どもが大人の発話を模倣することによって獲得されるのではなく、その発達の筋道と到達点が遺伝によってあらかじめ定められていると考えるのです。この授業では、この生成文法理論の仮説が妥当であることを示す実際の母語獲得(特に日本語と英語の獲得)からのさまざまな証拠を議論します。生成文法理論に基づく母語獲得研究の意義や研究方法、主な研究成果や今後の課題について、できるだけわかりやすく説明します。

テキスト・参考文献 テキストは教科書は使用せず、ハンドアウトを配布します。参考文献は杉崎 鉦司(2015)『はじめての言語獲得—普遍文法に基づくアプローチ』(岩波書店)

講義形態 主に講義形式で進めますが、受講生の皆さんからの積極的な質問を期待します。

この課目で前提とされる知識など 前提知識は特に必要ありません。生成文法理論に関する基礎知識があると、理解が深まります。

杉崎 鉦司
すぎざき こうじ



関西学院大学教授

生成文法理論に基づく母語獲得研究が専門です。主に、日本語や英語を対象に、文の構造や意味にかかわる性質の獲得について調査を行っています。2003年コネチカット大学言語学科博士課程修了(Ph.D. in Linguistics)。主要著書・論文に『はじめての言語獲得—普遍文法に基づくアプローチ』(2015年 岩波書店 日本英語学会賞)、“On the Acquisition of Prepositions and Particles” (2016年 *The Oxford Handbook of Developmental Linguistics*, OUP)など。

認知言語学Ⅱ

認知言語学 ④

内容は通年講座を参照

池上 嘉彦
いけがみ よしひこ



東京大学名誉教授

英語を歴史的・通時的にみる

英語史概論

史的言語学 ④

英語という言語の特徴を理解するためには、それがたどってきた歴史を学ぶことが不可欠です。英語の起源はどこにあるのか、英語に見られる不規則性は何に由来するのか、英語はいかにして世界的な言語となったのか等の問題に歴史的・通時的な視点からアプローチすることで、多面的な英語観、言語観を形成することが本講義の目標です。英語史の通史を描いていきますが、とりわけ内

面史(言語体系の変化)と外面史(言語を取り巻く社会の変化)の連動に注目します。

講義は、主にテキストではなくスライドを利用して進める予定です。参考文献は適宜紹介していきますが、まず堀田隆一(著)『英語の「なぜ?」に答えるはじめての英語史』(研究社、2016年)を参照してください。

堀田 隆一
ほった りゅういち



慶應義塾大学教授

PhD (Glasgow University, 2005)。主要出版物:『英語の「なぜ?」に答えるはじめての英語史』(研究社、2016年)、『英語史で解きほぐす英語の誤解—納得して英語を学ぶために』(中央大学出版部、2011年)、『スプリングの英語史』(翻訳)(早川書房、2017年)、『The Development of the Nominal Plural Forms in Early Middle English (Tokyo: Hituzi Syobo, 2009)』。英語史の話題を日々提供する「hellog ~英語史ブログ」(<http://user.keio.ac.jp/~rhotta/hellog/>)も継続中。

テキスト・参考文献 堀田 隆一 『英語の「なぜ?」に答えるはじめての英語史』 研究社、2016年。

この課目で前提とされる知識など 必須ではありませんが、入門・概論レベルの言語学の知識があると望ましいです。また、英語のほかにフランス語やドイツ語などの印欧語を学んでいると英語史の理解が深まります。

講義形態 スライドを参照しながらの講義形式が中心になります。

失われつつある言葉から言語学を学ぶ

言語学入門：言語の多様性入門

言語学入門 

今年2022年は国際連合総会によって宣言された「国際先住民言語の10年 International Decade of Indigenous Languages」(IDIL2022-2032:

<https://en.unesco.org/idil2022-2032>)

の1年目です。これは2019年の「国際先住民言語年」に続くもので、現在危機的状況にある先住民言語の保存、再活性化、奨励・向上を目指しています。先住民言語を守り、言語の多様性や多言語使用を維持していくことは、持続可能な開発目標(SDGs)の達成のための重要な要素だと考えられています。

この記念すべき年にこの授業では、世界的に、言語学、言語の多様性、そして危機言語の最良の入門書の呼び声高い Evans, Nicholas.

2010. *Dying Words: Endangered Languages and What They Have to Tell Us*. Malden, MA: Wiley-Blackwell. を教科書にとりあげ、先住民言語を中心とした世界の言語の多様性に入門します。それを通して、世界の言語の多様性の理解に欠かさない言語学の基礎知識も同時に学んでいきます。音声学、音韻論、形態論、統語論、意味論、文字論などの各分野を少しずつ勉強します。

ふだん読み書きしている日本語や英語以外の言語をたくさん観察することになり、何が何だかわからないこともあると思いますが、授業を通して言語学を学び、改めて言語学の「めがね」で観察すると、その美しさや不思議さを理解できるでしょう。

テキスト・参考文献 適宜資料を配ります。授業はスライドまたはハンドアウトで行います。教科書についてはガイダンスで指示します。Evans, Nicholas. 2010. *Dying Words: Endangered Languages and What They Have to Tell Us*. Malden, MA: Wiley-Blackwell. (日本語訳: ニコラス・エヴァンズ (2013) 『危機言語: 言語の消滅でわれわれは何を失うのか』 京都大学学術出版会.)

この課目で前提とされる知識など 入門なので前提知識は必要ありません。

講義形態 講義形式で進めます。

長屋 尚典
ながや なおのり



東京大学大学院人文社会系研究科・准教授
PhD in Linguistics (Rice University, 2011).

オーストロネシア諸語、フィールド言語学、言語類型論。主要著作・論文: 「意図と知識—タガログ語のma-動詞の分析—」(2019, 『認知言語学を拓く』)。

“The thematic/categorical distinction in Tagalog revisited: A contrastive perspective” (2019, 『言語研究』)。

“Focus and prosody in Tagalog” (2018, Hyun Kyung Hwang との共著, *Perspectives on Information Structure in Austronesian languages*)

<https://sites.google.com/site/naonorinagaya/>

「なぜ」を問うところから何が見えてくる

日本語文法理論 I

日本語文法理論 ④

内容は通年講座を参照。

尾上 圭介
おのえ けいすけ

東京大学名誉教授



IPA をもとにして音声学的な知識と技能を学ぶ

調音音声学

音声学 ④

この授業では、IPA (International Phonetic Alphabet) を用いた調音訓練を通して音声学の基礎を身につけることを目指します。世界の言語で音素的に区別される多様な音声に関わる調音的な知識と技能を学びます。受講者には、解説を受動的に聞くだけでなく、IPA 記号の手本の発音の模倣をしてもらいます。そして、参加者の発音に関する教師からのフィードバック（正誤と発音補正の方法）を授業中に共有することを

積み重ねます。その過程で、調音の内省能力と聞き分け能力は進歩します。参加者の積極的な取り組みを期待します。

受講者にとって耳慣れない発音も多く扱いますが、日本語で聴き慣れているはずの発音が、調音音声学的にはどのように理解できるか、その微細な違いが IPA でどのように表記し分けられるかも解説します。さらに、IPA の記述用語と音韻論の弁別素性の用語との対応を解説すること

テキスト・参考文献 教科書は使用せず、ハンドアウトを配布します。

この課目で前提とされる知識など 特にありません。

授業形態 模倣発音の実習を交えながら講義を進めます。

中川 裕
なかがわ ひろし

東京外国語大学総合国際学研究院教授
PhD (Linguistics)

音声学、音韻論、コイサン言語学
主要業績は下記のページをご覧ください。
<https://researchmap.jp/nhirosi>



で、音声学と音韻論の用語上の橋渡しをします。

この授業を通して得た音声学の知識と技能は、音声学・音韻論的な記述を正確に読みとるためにも、言語音の歴史的变化を理解するためにも、言語学的フィールドワークのためにも、応用音声学的研究のためにも役立ちます。

生成文法 I

生成文法入門 ④

内容は通年講座を参照。

大津 由紀雄
おおつ ゆきお

関西大学客員教授



日本語文法を最深部から説き起こす

日本語文法理論 II 川端文法入門

日本語文法理論 ④

かつて「大文法家時代」には「山田文法」「松下文法」「時枝文法」など、固有名を冠する文法論がいくつもありました。川端善明の「川端文法」はその掉尾を飾る、日本語文法論の最高峰です（私はひそかに哲学史上の『純粹理性批判』になぞらえています）。川端文法は1950年代末から70年代にかけて主要な部分が構築されましたが、当時から哲学的で難解と評され、読解に挑んで破れた読者も多く、また誤読もされてきました。

川端文法が難解に映るのは、通常

では考えられないほど深いところから説き起こし、思考の道筋を厳密に、かつ凝縮した表現で書き留めるからです。しかし、きちんと辿っていけば思考を追うことができ、深甚な知見に心動かされ、先見の明に驚き、透徹した論理に納得します。川端文法を知るとは、そのような体験をすることです。日本語文法に関心のある方には、ぜひ川端文法を体験していただきたいと思います。

本講義では、川端の論文「用言」（1976）をなぞるように読み、必要に応じて他の論文も参照しながら

小柳 智一
こやなぎ ともかず

聖心女子大学現代教養学部教授
1999年国学院大学大学院文学研究科博士課程後期修了、博士（文学）。
専門は日本語学、日本語文法史。
主な著作は『文法変化の研究』（くろしお出版、2018）、『認知言語学を拓く』（共著、くろしお出版、2019）、『副詞の入り口—副詞と副詞化の条件—』（執筆）、『日本語と世界の言語のとりたて表現』（共著、くろしお出版、2019）、『日本語のとりたて表現の歴史』（執筆）、『構文と主観性』（共著、くろしお出版、2021）、『4種類の「主観」の用語法』（執筆）など。



解説していきます。この論文は講座物の1編として用言を論じるものですが、川端文法の概論にもなっている、驚異的な論文です。

テキスト・参考文献 教科書は使用せず、使用する資料（オリジナルの資料を多く含む）はすべて配布します。参考文献は授業時に随時紹介します。

この課目で前提とされる知識など 特にありませんが、言葉と世界に対する素朴な好奇心と、複雑さを楽しむ精神の柔軟さと、少しの根気強さがあれば、とても望ましいと思います。

講義形態 講義形式で進めます。

言語研究の全体像を知る

言語学概論

言語学概論 ①

この講義では言語研究の5つの主要分野について、各分野の専門家が2回(2週)ずつリレー形式で解説を行います。「言語学概論」はこれまで半期の課目として、一人の講師がすべての分野を加えて開講されてきました。今年度は前期と後期の二期に分けて開講し、合計20回の講義を計10名の講師が分担する形で、言語研究の各分野の考え方と言語研究の面白さを解説いたします。半期だけ

の履修も可能ですが、言語研究の全体像を理解するためにも両期とも受講されることをお勧めします。

今期は言語類型論、言語心理学、日本語文法理論、史的言語学、生成文法の5分野について解説したいと思います。単位取得を希望する人は、5名の講師が一題ずつ出すテーマから1つを選んでレポートを提出していただきます。

テキスト・参考文献各講師が指定(もしくは配布)する。

この課目で前提とされる知識など ことばに関心のある人はどなたでも受講できます。言語学を一から学びたい方、言語研究の全体像をもう一度理解したい方、大学等で言語学概論をどのように教えたらいいか模索している方に特にお勧めの授業です。

講義形態 講義形式で進めます。

長屋 尚典
ながや なおのり
東京大学准教授



佐野 哲也
さの てつや

明治学院大学文学部英文学科教授
専門は言語獲得。

University of California, Los Angeles, Ph.D. in Linguistics
主要著作: "Remarks on theoretical accounts of Japanese children's passive acquisition," in *Generative Linguistics and Acquisition: Studies in Honor of Nina M. Hyams, John Benjamins*, 2013. など

川村 大
かわむら ひとし

東京外国語大学大学院教授

国語学(文法、文法論、日本語史)。

1990年東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。博士(文学)。『形述語文の研究』(くろしお出版、2012)、「動詞形述語文と無意志自動詞述語文との連続・不連続について」(『国語と国文学』89巻11号、2012)「ラレル形述語文における自発と可能——古代語からわかること——」(『日本語学』32巻12号、2013)など。

吉田 和彦
よしだ かずひこ

京都産業大学外国学部客員教授

京都大学名誉教授。コーネル大学 Ph.D.(言語学)
専門は印欧語比較文法、歴史言語学、一般言語学。

主要著作: *The Hittite Mediopassive Endings in -ri* (Walter de Gruyter, 1990)、『言葉を復元する——比較言語学の世界』(三省堂、1996)、『比較言語学の視点——テキストの読解と分析』(大修館書店、2005)。

高橋 将一
たかはし しょういち

青山学院大学文学部英米文学科教授

統語論、意味論、統語論と意味論のインターフェイス。

2006年マサチューセッツ工科大学大学院博士課程言語学・哲学科修了、Ph.D.

主要論文: The hidden side of clausal complements. *Natural Language & Linguistic Theory* 28:343-380、More than two quantifiers. *Natural Language Semantics* 14:57-101 など。

その他の講師は各講師の講義欄参照

Langackerを読む：認知文法の基礎から最前線まで

認知言語学Ⅰ

認知言語学入門 ㊦

この講義では、「言語（表現）の意味とは何か」、「文法は意味とどのように関係しているのか」、「語彙と文法はいかなる関係にあるのか」、「そもそも文法（的な知識の単位）は何のためにあるのか」、「言語の使用を可能にする知識とはいかなるものか」等の言語学の根本問題に対する認知文法(cognitive grammar)の考え方を、この理論の創始者 Ronald W. Langackerの著作を深く正確に読み解くことを通して、多角的に検討します。ここまでは一昨

年度と昨年度の講義とほぼ同じですが、今年度は、この理論の基本的な考え方を正しく理解したい人やこれからこの理論に本格的に取り組みたい人を主な対象として、草創期から2010年頃までの文献を中心的な題材とし、最後に最新の展開を紹介する、という構成にする予定です。英語が専門でない人にも原典に真剣に取り組むことの意義と楽しさを十分に共有していただけるように努力します。

テキスト・参考文献 講義で用いる（画面共有する）テキストはこちらで準備してあらかじめ受講者に共有する予定です。基本的な参考文献のリストは開講前に共有する予定ですが、それ以外の文献も講義中に適宜紹介します。

この課目で前提とされる知識など（認知文法を含む）認知言語学についての知識は前提としませんが、開講前に西村義樹・野矢茂樹著『言語学の教室：哲学者と学ぶ認知言語学』（中央公論新社）を通読されることをお勧めします。受講者には日本語で書かれた基本的な文献をいくつか開講前に共有する予定です。

講義形態 講義形式で進めます。

語用論の基礎から応用まで

語用論入門

語用論 ㊦

語用論は、会話を中心とした日常的なコミュニケーションのメカニズムを研究する学問分野です。会話で使われる言葉の意味を解釈するとき、また会話の中で言葉になっていないメッセージを汲み取るとき、どちらも相手の「意図」や「態度」といった、目には見えない心の状態を推し量ることが鍵になります。この講義では、コミュニケーションにおいて、相手の意図や態度を推測する能力を「語用能力」としてとらえます。そしてその働きや発達、障害について

考察していきます。さらに広告やコマーシャルといった、視聴者の購買を促すことを目的とした情報伝播を取り上げ、コミュニケーションの一形態としてその特徴を語用論の枠組みで検討します。広告やコマーシャルは、メッセージの送り手が見えにくいことが多く、その特徴はSNSなどに見られるメッセージと共通しています。このようなコミュニケーションにおいては、聞き手がメッセージの送り手の真意を正しく把握することが難しくなりがちです。こ

テキスト・参考文献 テキスト：今井邦彦編「最新語用論入門12章」大修館 2009年。参考文献：Tanaka, K. 1999. Advertising Language: A Pragmatic Approach to Advertisements in Britain and Japan. Routledge.

この課目で前提とされる知識など 特にありません。

講義形態 講義に加え、ワークシートやグループセッションも予定しています。

認知言語学Ⅱ

認知言語学 ㊦

内容は通年講座を参照。

西村 義樹

にしむら よしき



東京大学文学部（言語学研究室）教授

専門は認知言語学、意味論、日英語対照研究。

1989年東京大学大学院人文科学研究科博士課程（英語英米文学専攻）中退。

『構文と事象構造』（共著、研究社、1998）、『認知言語学Ⅰ：事象構造』（編著、東京大学出版会、2002）、『明解言語学辞典』（共編著、三省堂、2015）、『日英対照 文法と語彙への統合的アプローチ：生成文法・認知言語学と日本語学』（共編著、開拓社、2016）、『メタリ・コーパス：母語話者の頭の中には何があるのか』（共編訳、くろしお出版、2017）、『認知文法論Ⅰ』（編著、大修館書店、2018）、『慣用表現・変則的表現から見える英語の姿』（共編著、開拓社、2019）、『認知言語学を拓く』、『認知言語学を紡ぐ』（いずれも共編著、くろしお出版、2019）など。

松井 智子

まつい ともこ



中央大学文学部教授

ロンドン大学ユニバーシティカレッジ文学部言語学科博士課程修了（PhD）。

著書に Bridging and Relevance (John Benjamins, 2000, 市河賞)、『子どものうそ、大人の皮肉』（岩波書店2013年）、『ソーシャルブレインズ』（分担執筆、東京大学出版会、2009）、『ミス・コミュニケーション』（分担執筆、ナカニシヤ、2011）などがある。

の授業では、語用論の理論に基づいて、それはなぜなのか、考えていきます。

池上 嘉彦

いけがみ よしひこ



東京大学名誉教授

語形成から言語と心の仕組みを探る

形態論・語形成論

形態論・語形成論 水

この講座では「語」という単位の性質や、複数の要素から語が作られる仕組みを取り上げます。たとえば、「ばえる」、「わかりみ」、「歩きスマホ」といった新語はどのように作られ理解されるのか、その形と意味に観察される一般化がどのような原則あるいは私たちの知識や心の仕組みによって説明できるかについて学びます。

語はレキシコン (= 頭の中の辞書) に登録されることにもとづく性質 (語彙性) を持つと同時に、複数の要素から成る語は、一定の条件下

で組み合わせて作られるという性質 (規則性) も示します。そのため、語形成を文法モデルの中でどう位置付けるかは、生成文法における名詞化をめぐる議論 (Chomsky 1970 など) を発端に50年以上にわたって重要な論点となってきました。講義では、日本語と英語の派生語や複合語の具体的な分析について論じながら、それが言語理論の枠組みの選択や人間の心の仕組みの理解にどうつながるのかについても触れる予定です。

テキスト・参考文献 授業で使用する資料とテキストはオンラインで配布し、参考文献は授業で必要に応じて紹介します。

この課目で前提とされる知識など 専門的な予備知識は特に必要ありません。

講義形態 講義が中心ですが、質問やコメントを受ける時間、および課題について議論する機会を設ける予定です

杉岡 洋子
すぎおか ようこ



慶応義塾大学名誉教授

シカゴ大学大学院言語学科博士課程修了 (Ph.D.)。語形成や語彙意味論、形態論と統語論の関係、語の処理に関わる心や脳のしくみを研究しています。

主要著書・論文: 『語の仕組みと語形成』 (共著、研究社、2002)、『I-2 形態論: 語形成』 (『よくわかる言語学』、ミネルヴァ書房、2019)、『名詞の意味と構文』 (分担執筆、大修館、2011)、『語の処理の心的・脳内メカニズム』 (共著、『形態論』、朝倉書店、2016)。Derivational affixation in the lexicon and syntax (with Takane Ito), Handbook of Japanese lexicon and word formation, pp.347-386. Mouton de Gruyter, 2016.

言語の社会関与性を探究する

社会言語学

社会言語学 水

〈社会〉は〈言語〉とどのように関わり、その関わりはどのような言語現象に見ることができるのでしょうか。そして、言語学理論にどのように〈社会〉を組み込むことが可能なのでしょうか。

今年度は、社会言語学のそのものずばりであるような「言語の社会関与性」をテーマに、言語接触、言語変化、社会言語学の理論と実践といった内容を扱います。社会言語学全体を見渡してこの学問領域の特徴

をつかんだうえで、とくに深入りするのには、言語接触と文法、さらに言語とアイデンティティ。見ているのは言語使用 (ないし使用された言語)、発話、ディスコースであり、考察するのは言語の中と外とそのインターフェイスです。初めての方から研究の領域に足を踏み込んでいる方までを想定して、「話者の見える言語学」としての社会言語学の魅力に誘います。

テキスト・参考文献 教科書は使わず、ハンドアウトを配布します。参考文献は適宜紹介します。

この課目で前提とされる知識など とくにありません。なんらかの言語学の知識があるとなお理解の幅が広がると思います。

【教室】でのディスカッションがあらたな知のきっかけになるかもしれません。

講義形態 講義と文献講読によって進めます。

嶋田 珠巳
しまだ たまみ



明海大学外国語学部教授

2007年京都大学大学院文学研究科行動文化学専攻言語学専修博士後期課程修了。博士 (文学)。著書に、『英語という選択—アイルランドの今』 (岩波書店 2016年)、共編著に『言語接触—英語化する日本語から考える「言語とはなにか」』 (東京大学出版会 2019年)、『時間と言語』 (三省堂 2021年)、共著書に『時間はなぜあるのか?—チンパンジー学者と言語学者の探検』 (ミネルヴァ書房 2022年) など。おもな論文として “Speakers’ awareness and the use of *do be* vs. *be after* in Hiberno-English”, *World Englishes* 35, 2016年。研究テーマとして「言語知識とその更新—アイルランド英語の現代的諸相からの理論と検証」など。



内容は通年講座を参照。

フィールドワークにおける音声学・音韻論的な調査手法の基礎を学ぶ

フィールド音声学

音声学 ④



東京外国語大学総合国際学研究院教授
PhD (Linguistics)
専門は音声学、音韻論、コイサン言語学
主要業績は下記のページをご覧ください。
<https://researchmap.jp/nhirosi>

この授業では(1)フィールド音声学と(2)フィールド音韻論の実習をします。

(1)手軽な道具で記録できる器械音声学的資料の収集・分析の手法を学びます。具体的には、口唇の撮影およびパラトグラフィー(舌と口蓋の接触の撮影)による調音的資料や、録音の音響分析資料(波形やスペクトログラムなど)から、重要な音声特性を読み取る訓練をします。そして、音の対立や変異をより良く記述するために音声資料を有効活用する

能力を養います。ここで学ぶ手法は、野外調査の現場だけでなく、日常的な環境でも利用でき、広く調査研究に役立てることが出来ます。

(2)未知の言語の調査は、基礎単語の発音を音声表記することから始めます。単語の表記の記録を溜めながら、音声的観察と同時に、音韻的分析を進めます。そして、その言語の音韻体系の骨格をまず把握します。このフィールド調査における音韻的分析の過程には、音声学・音韻論の本質を実践的に理解するための

要諦が含まれます。この授業では、受講者にとって未知の言語の音声表記資料を使って、音韻分析を実習し、その言語の音韻体系の一部を解明する演習を行います。受講者は音韻論的分析の基礎を体得することが出来ます。

テキスト・参考文献 教科書は使用せず、ハンドアウトを配布します。

この課目で前提とされる知識など 調音音声学の基礎的な知識・技能(たとえばIPAの基本の理解)を持っていることが期待されます。

授業形態 実習を交えながら講義を進めます。

生成文法 I

生成文法入門 

内容は通年講座を参照。

大津 由紀雄
おおつ ゆきお

関西大学客員教授



「意味」の意味を掘り下げる

意味論の基礎

意味論 

意味論は理論言語学の中で一番とっつきやすい分野に見えて実は一番とっつきにくい分野です。その理由の一つは、ただの「意味論」という分野が存在しないことです。存在するのは形式意味論、語彙意味論、認知意味論、etc.であって、「意味論」ではありません。この講義では、どの立場に立つにせよ、意味(論)について最低限心得ておきたい問題をじっくり考えてみましょう。

私の担当する意味論は2018年度、2019年度、2021年度に続

いて四回目です。2018年度は「意味は言語使用者の心の状態によっては決定されず、物理的環境に依存する」という意味の物理的外在主義を、2019年度は「概念・思考は社会環境に依存する」という概念・思考の社会的在外主義を、2021年度は社会的在外主義に対する批判を扱いました。2022年度は引き続き物理的外在主義・社会的在外主義に関する論文を丁寧に読みながら、意味(論)の基礎を掘り下げてみたいと思います。

酒井 智宏
さかい ともひろ

早稲田大学文学学術院教授

意味論、語用論。

2003年東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了、博士(学術)

2004年パリ第8大学大学院言語学専攻博士課程修了、Docteur en Sciences du Langage 主要著作:『正しく書いて読むための英文法用語事典』(分担執筆、朝倉書店、2019)『最新理論言語学用語事典』(分担執筆、朝倉書店、2017)、『理論言語学史』(分担執筆、開拓社、2017)



継続して受講する方にとっても、今回から新たに受講する方にとっても、等しく有意義な講義となるように努めます。

テキスト・参考文献 プリントを配布します。参考文献は、授業中に紹介します。

この課目で前提とされる知識など 予備知識は必要ありません。

講義形態 講義形式で進めます。

理論言語学講座夏期集中

※ 100分×10コマの講義の時間数を3日間で変則的に組み込みます。
時間割が決まり次第、研究所公式サイト等でお知らせいたします。

言葉が何かを意味するというのはどういうことなのか？ 8月5-7日

言語哲学入門

言語学特殊講義

言葉について哲学します。そもそも哲学するとはどういうことかを説き起こすところから始めましょう。現代の言語哲学の祖とも言うべき哲学者はフレーゲです。この講義ではまず伝統的考え方（意味の観念説）を示して、その伝統的考え方への批判を踏まえて、フレーゲの考え方を見ていきます。フレーゲ的枠組は「文脈原理」と「意味の二相化（SinnとBedeutung）」ですが、意味の二相化についてはあまり踏み込まないつもりです。また、ラッセルの記

述理論も言語哲学入門の定番の話題ですが、省略します。フレーゲ的枠組から受け継ぐべき考え方として文脈原理を中心に説明します。続けてフレーゲ的な考え方を越える考え方を見ていきます。古典的概念観から新しい概念観へ、記号的言語観からコミュニケーション的言語観へ、あるいは言語変化についてといった話題を取り上げたいと考えています。とても煩瑣な議論が展開される現代の言語哲学ですが、この講義ではあまり細かく複雑な議論には立ち入り

野矢 茂樹
の や しげき



立正大学文学部哲学科教授

専門は哲学。

東京大学大学院博士課程単位取得退学。
主な著書に、『論理哲学論考を読む』（ちくま学芸文庫、2006年）、『哲学・航海日誌』（中公文庫、2010年）、『大森荘蔵』（講談社学術文庫、2015年）『心という難問』（講談社、2016年）、『語りえぬものを語る』（講談社学術文庫、2020年）、『哲学探究という戦い』（岩波書店、2022年）など。

ません。そのかわり、言葉を哲学するときの考え方の根っこに触れることができるのではないのでしょうか。

テキスト・参考文献 ハンドアウトを配布します

この課目で前提とされる知識など きわめて入門的な講義ですから、予備知識はまったく不要です。

授業形態 講義形式で進めます。

日本語固有の現象から文周縁部構造を司る普遍性に迫る 8月19-21日

オンライン（予定）

生成文法Ⅲーカートグラフィー研究と日本語の文周縁部構造 生成文法

斎藤 衛
さいとう まさる



南山大学国際教養学部国際教養学科教授
スタンフォード大学哲学科卒業（1979）、同大学言語学修士課程修了（1980）、マサチューセッツ工科大学言語学博士課程修了（1985）。主要編著には、『*Move α*』（H. Lasnikと共著、1992、MIT Press）、『*The Free Word Order Phenomenon*』（J. Sabelと共編著、2005、Mouton de Gruyter）、『*The Oxford Handbook of Japanese Linguistics*』（S. Miyagawaと共編、2008、Oxford University Press）、『*Japanese Syntax in Comparative Perspective*』（編著、2014、Oxford University Press）などがある。

Luigi Rizzi氏のイタリア語の分析（1997）に端を発して、様々な言語の文周縁部構造が研究され、その構造の背後にある普遍的なメカニズムも解明されてきました。日本語についても、補文標識の統語的・意味的性質に関する研究に加え、上田由紀子氏のモーダルの研究、遠藤喜雄氏の終助詞の研究などがあります。本講義では、これらの研究を詳細に検討した上で、(1) 文周縁部構造を選択制限と意味解釈から説明することはできるのか、また、その場合には、どのようなカートグラフィー構造が導かれるのか、(2) 日

本語の補文標識の分析に基づいて、Gottlob Frege氏の「意義と意味について」（1892）以降、長らく問題とされてきた補文の意味解釈についてどのような帰結が得られるのか、特に、命題、事象、発話といった概念の位置づけを明確にすることができるのか、(3) 日本語のWh句は、イタリア語と同様に、焦点句として分析されるべきなのか、また、そうであるとすれば、Wh疑問文など、Wh句を含む表現はどのような意味表示を持つことになるのか、といった問いを追求します。

テキスト・参考文献 適宜、講義資料を配布します。また、参考文献は、講義の中で紹介していきます。

この課目で前提とされる知識など 言語学入門、統語論入門程度の知識を前提とします。

講義形態 講義形式で進めます

教室地図

● 一般財団法人 ラボ国際交流センター 東京言語研究所
事務局

〒169-0072 東京都新宿区大久保 1-3-21 2F
TEL:03-6233-0631 FAX:03-6233-0633

E-Mail:info@tokyo-gengo.gr.jp <http://www.tokyo-gengo.gr.jp/>



- 東京メトロ副都心線「東新宿駅」出口 B1 より徒歩 1 分
- 都営地下鉄大江戸線「東新宿駅」出口 A1 より徒歩 5 分
- JR 山手線「新大久保駅」より徒歩 10 分
- 西武新宿線「西武新宿駅」より徒歩 15 分